南京国际和平通讯

Nanjing International Peace Communication

「南京国際平和通信」

主催：侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館
編集：南京大虐殺史及び国際平和研究院

８月15日世界各地から140名の青年代表が記念館で平和集会を開催

国内外の学者が南京に集まり、人類運命共同体視野における日本軍の中国侵略と南京大虐殺研究を交流

記念館が南京大虐殺生存者を慰問し戦争記憶を次の世代へ伝承するプロジェクトをスタート

05

2019年11月 総第05期
Nov 2019 Issue 5

編集者から

読者の皆様：

あっという間に秋がやってきました。第5期「南京国際平和通信」をどうぞお読みください。読んでくださるとうれしいです。

この２ヶ月の間に、記念館ではいろいろな平和をテーマとしたイベントを開催しました。

８月15日は日本の無条件降伏74周年記念日で、中国、日本、韓国、アメリカ、フイリッピンなど10数カ国と地区の140名の青年代表が記念館で平和集会を開催しました。

南京大虐殺生存者はほとんど高齢で、記念館では全ての登録されている生存者を訪ね、慰問し、彼らの子孫も歴史の伝承人になるようにと、「戦争記憶を次の世代へ伝承するプロジェクト」をスタートしました。

「戦争と平和：人類運命共同体を視点とする日本軍の中国侵略と南京大虐殺研究」をテーマとした討論会が南京で開催され、国内外の学者が南京に集まり、南京大虐殺史、抗日戦争史、中日関係、平和学、戦争記憶などのテーマについて討論しました。

この通信を読み、歴史を銘記し、平和を大切にしましょう。

トップニュース

私たちは一緒に

８月 15 日、中国、日本、韓国、アメリカ、フイリッピンなど 10 数カ国と地区の平和を愛する方々が記念館で平和集会に参加しました。

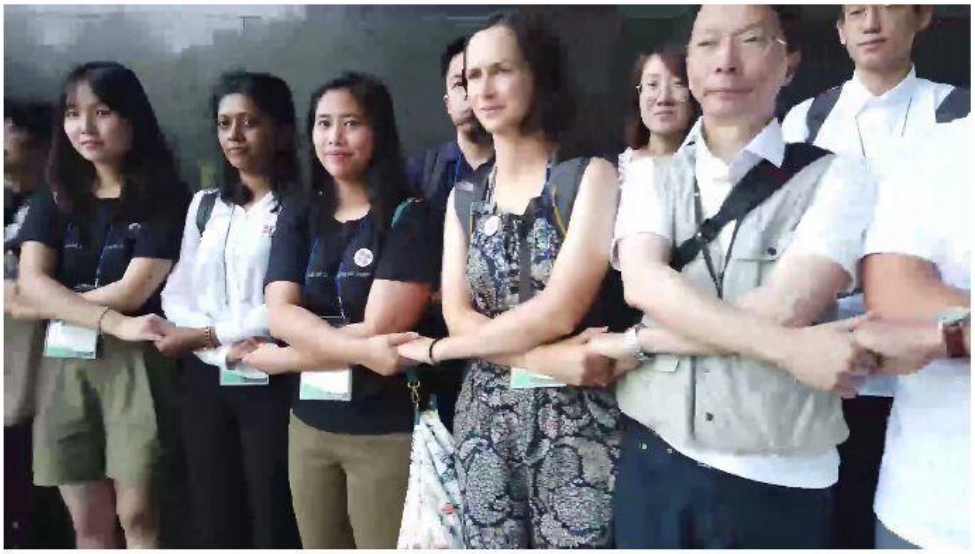
23 回目となる日本「神戸南京心連心会訪中団」が記念館に来訪されました。20 名の団員が白い菊を手に持って静かに立っていました。彼らが持っている横断幕に「追悼」「前事を忘れず、事後の師とする、ともに未来に向かう」などの内容がとても目立ち、集会後、南京大虐殺生存者岑洪桂さんの話した悲惨な戦時体験を聞き取りました。

宮内陽子団長が「私たちはこの父親や先祖が虐殺と暴行を行った土地で、なんの罪もなく無残に命を奪われた人々を追悼し、悲しくて言葉も出ない」と言い、歴史の伝承に努力していきたい気持ちも表しました。

140 名の国内外の青年各自が献花し、遭難者を追悼しました。彼らは南京大学と韓国東北アジア平和教育学院がともに開催した「人類運命共同体視野における国際平和教育」夏休み研修クラスに参加した大学生で、韓国東北アジア区域平和教育学院院長李在永が「南京は東北アジアで最も耐え難い戦争の傷を負ってきた都市であり、南京大虐殺を覚えるために一番よい方法は自分の目で観察し、自分の

耳で聞くことだ」と言いました。

　追悼活動が終わってから、青年たちは壁に自分の母国語で「平和を愛している」などのメッセージを書き残し、張建軍館長が皆さんと懇談しました。



動き

記念館では「全民族抗日戦争勃発 82 周年」記念活動を開催

７月７日午前、記念館では「全民族抗日戦争勃発 82 周年」記念活動が開催され、元八路軍教導第一旅団の元兵士王生さんと南京市小学生代表と記念館職員代表及び見学者代表らがセレモニーに参加しました。

朝８時に、まず国旗をあげるセレモニーがあり、その後教師と館の職員が英雄たちの手紙を読み上げ、抗日戦争に参加した元兵士王生さんが戦時中の体験を思い出し、子供たちに、「歴史を銘記し、平和を大切にする」という精神のもとで、今の平和な暮らしを大事にしながら、もっとしっかり勉強するようにと励ましました。

オックスフォード大学の学生代表 12 名が記念館見学

7 月 7 日午後、中英サミット主催の「中国への旅」代表団ご一行 17 人が記念館を訪問し、館長と懇談し、張建軍館長が彼らに南京大虐殺の歴史を紹介しました。

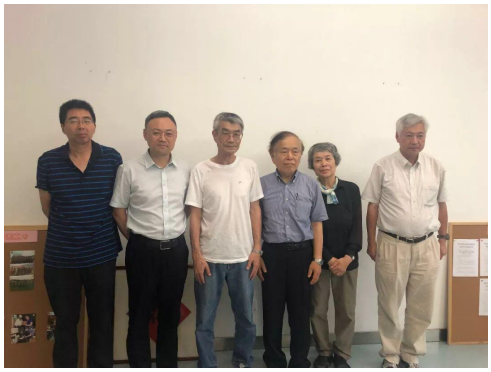
懇談後、団員たちが「南京大虐殺史実展」を見学し、遭

難者に黙祷をささげてから白い菊を献花しました。団長のシュー・フェンドリーさんは「南京に来て、最初に訪れたのがこの記念館で、大変国際的視野のある展示を通じて中国の抗日戦争の歴史を勉強することができました。我々はイギリス政党の若い代表として、このような歴史を繰り返さないように努力する責任がある」と感想を述べました。

日本の学者小野賢二さんご一行が記念館を見学

7 月 6 日午後、日本の民間人南京大虐殺研究者小野賢二さんご一行 4 人が記念館を見学し、張建軍館長と交流しました。

小野さんはかつて福島県のあるケミカル工場で 40 年以上勤務して定年退職しました。南京大虐殺の歴史を 30 年近く調査と研究し、300 人ぐらいの南京大虐殺に参加した元日本軍兵士及び遺族にインタービューをし、200 人以上の証言や元兵士らの従軍日記など色々な資料を集めました。



右の写真は左２が張建軍館長で、左３が小野賢二さんです

彼は連続 28 年間、日本の青年を率いて歴史の真相を追いかけた

7 月 30 日、日本青年学生平和友好祭実行委員会委員長、中国平和の旅、ポーランド平和の旅事務局長、現在 73 歳の石川克己先生が「日本平和の旅訪中団」を率いて記念館に交流に来て、その後「南京大虐殺史実展」を見学しまし

た。

1992 年以来、石川克己先生が侵略の歴史の真相を追いかけるために、連続 28 年間、日本の青年を率いて訪中しました。累計 3000 人の日本青年が訪中団に参加し、近距離で歴史を学びました。

百名のマカオ青年が記念館を訪問

7 月 15 日、中国マカオ特区の青少年「新時代同心行」訪問団ご一行 124 名が記念館を見学しました。これはマカオが返還されてから、一番規模が大きく、またレベルの高い青少年訪問団でした。

中国台湾訪問団が記念館を見学、交流

8 月 2 日、中国台湾訪問団ご一行 41 名が記念館を訪問し、第 22 期の南京紫金草国際平和学校の交流活動に参加しました。団員たちは「南京大虐殺史実展」を見学し、生存者艾義英さんの悲惨な戦時体験を聞き取りました。記念館館員王立が「記憶がいつまでも生きている一南京大虐殺の歴史及び思考」というテーマで講演しました。

イタリア青年学生「平和の鐘をついた時大変感動した！」

8 月 29 日、南京大学イタリアクラスの 12 名の留学生代表が記念館を訪問し、第 24 期の南京紫金草国際平和学校の交流活動に参加しました。当日朝 8：30、みんなで公祭広場にて平和の鐘をつきました。

資料館の展示と平和の鐘をつくセレモニーがイタリアの若者に深い印象を与えました。「これは大変悲しい一時で公共記憶の重さを実感でき、この瞬間はいつまでも忘れることはないでしょう」とみんなが感動を語りました。

南京大虐殺生存者万秀英さんが死去

南京大虐殺生存者万秀英さんが 7 月 25 日 22 時 15 分に死去し、享年 91 歳でした。これで登録されている生存者はわずか 82 名になりました。7 月 31 日午前、記念館は「南京大虐殺史実展」地下一階の生存者写真壁の前で、万秀英さんのために消灯式を行いました。

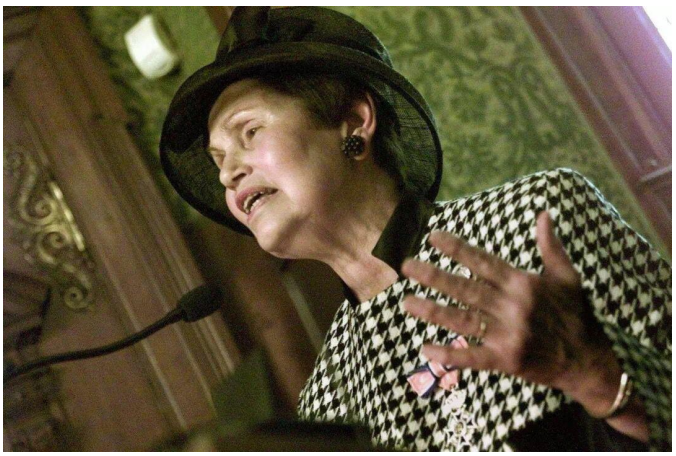
日本軍が南京を占領したとき、万秀英さんの 19 歳のお兄さんがある日、日本軍の検問を通りかかった時、日本軍に頭を切られてしまいました。

元オランダ人慰安婦制度被害者ヤン・ルフさんが死去

8 月 19 日朝、元オランダ人慰安婦制度被害者、人権活動家ヤン・ルフさんがオーストラリアアドレドのご自宅で死去し、享年 96 歳でした。

ヤン・ルフさんが 1923 年オランダの植民地であったインドネシアに生まれ、第二次大戦中、彼女は両親と一緒に拘置キャンプに連れて行かれ、その後数名の女の子と一緒に、サマランという町に連れて行かれ、そこで無残に日本軍に蹂躙されました。

1992 年 12 月、彼女は東京で「戦争被害女性国際検証大会」に出席し、はじめて自分の過去を打ち明け、日本軍慰安婦制度被害者のために正義を訴えました。1994 年、彼女の自伝「Fifty Years of Silence」（中国語訳名：「沈黙の 50 年、ある元日本軍慰安婦制度被害者の自伝」が 6 種類の言葉で出版され、彼女の遭遇と心の葛藤を記録しました。



学術研究討論

国内外の学者が「人類運命共同体視野における日本軍の中国侵略と南京大虐殺研究」をテーマとした討論会を開催

８月 10 日、国内外の学者が南京に集まり、「戦争と平和：人類運命共同体視野における日本軍の中国侵略と南京大虐殺研究」をテーマとした討論会が開催され、国内外の 30 近くの大学と研究所、５つの公文書館、博物館の 80 人ぐらいの学者が 45 の論文を持って参加し、テーマは南京大虐殺史、抗日戦争史、中日関係、平和学、戦争記憶などがありました。

学科を超えて南京大虐殺の研究を推進

7 月 3 日、南京大虐殺史と国際平和研究院 2019 年学術委員会会議兼「日本軍の侵華と南京大虐殺研究」創刊 1 周年記念討論会が南京で開催されました。

南京大虐殺史と国際平和研究院院長張憲文教授が「南京大虐殺の研究はもっと実証研究、ミクロ的な研究、平和学研究と学科を超えた研究が必要で、半世紀以来、南京大虐殺の研究はこれまで蓄積してきた研究段階を踏まえながら、新しい方法と視野で研究を模索していくべきだ」と述べました。

温もり

溶けるほどの猛暑、記念館の若者たちが平和のために「塩になる」

7月下旬の南京はずっと猛暑が続き、記念館では毎日120名の警備員と55名の清掃員、12名のガイド、20数名の設備エンジニア、34名のボランティア及び数十名のフロント係りと職員が協力しあい、記念館の安全と秩序を守り、見学者に良いサービスを提供していました。

ガイドの王文婷さんがいくつかの団体に説明をした後、背中になんと塩の跡が現れ、1号門で秩序を維持していた林祥さんが、まるで「太陽に溶かされた」ようで、レリーフ広場で寄付と献花を担当している袁万媛さんは汗で化粧が全部落ちてしまい、公祭広場の日に照らされている石が52度にもなり、十字碑と平和の鐘を守っている肖浩さ

んと王申輝さんが「足がやけどしそう」と言いながら、みなさんは、記念館での仕事は有意義で、苦労をしながらもやりがいを感じていました。